

草原がつなぐ人・自然・文化

全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.52 (Oct. 2022)



栃木県日光市のキスゲ平に群生するニッコウキスゲ（立原遼氏提供）

「未来に残したい草原の里 100 選」フォーラム

「未来に残したい草原の里 100 選」では、2021 年度の募集を経て、全国から 34 の草原の里が選定されました。2022 年 10 月 18 日、東京都内の東京農業大学の横井講堂にて、認定書の授与式、それを記念した講演、選定された団体からの事例報告会な

どが開催されました。

認定書の授与式と基調講演の様子について、以下に報告します。6 つの草原の里からの報告の様子は、次号のニュースレターでお伝えする予定です。

授与式・選定記念フォーラム報告

(高橋泰子：NPO 法人緑と水の連絡会議)

昨年 9 月から募集を始めた「未来に残したい草原の里 100 選」。①草原の自然、②草原からの恵み、③草原を維持するしくみや、価値を享受するしくみの良さ、④共生型の実現に向けた波及効果（ロールモデルとしての期待）、⑤草原に対する思いの強さ、の審査基準をクリアした 34 の草原の里が、令和 4 年 5 月、「未来に残したい草原の里」として選定された。その認定書の授与式を兼ね、選定記念フォーラムが「草原のある暮らしに育まれた『共創資産』を次代につなぐ」との銘を打ち、10 月 18 日の午後、東京農業大学横井講堂で開催された。

当日は選定を受けた全国の草原の里の関係者に加え、一般の参加者、そしてユーチューブ配信での視聴者を含め、数百人の参加となり草原に対する理解の広がりに関心の高さがうかがわれるものとなった。

開会に先立ち、全国草原の里市町村連絡協議会会長である静岡県東伊豆町の岩井茂樹町長が、熊本県阿蘇市で第 10 回全国草原サミットが開催された折り、草原 100 選を行うことがサミット宣言として採択され本日に至っているとの経緯を説明された。「未

来に残したい草原の里 100 選」は草原を核としての地域づくり、草原を知らない人々に草原を知らしめる、草原の里同士の仲間として情報交換をして人とのつながりのある草原を次世代につなげ、守っていくことが目的であると挨拶した。

続いて会場を提供していただいた東京農業大学学長の江口文陽様から木材をふんだんに使った横井講堂で行政の方もお迎えし、盛大なフォーラムが開催されることを嬉しく思う、草原の中にも食物連鎖があり隠れた営みがありそれが地球を育てている、その草原を未来に残すということは、暮らしやすい持続可能な世界につながる、とのお祝いの言葉をいただいた。

次に来賓である環境省自然環境局自然環境計画課長の堀上勝様からは、環境省は 2030 年までに陸域・海域で 30%以上を人と自然の共生する地域にしていく（サーティバイサーティ）、保護地域ではないが効果的な保全が行われていく場を OECM とし国際保護地区として認定していく、そのためには民間の活動が必要であり、共創資産としての草原保全は持続可能な世界に進んでいくためにも必要である、との挨拶があった。

続いて、農林水産省農村振興局農村政策部都市農村交流課農泊推進室長の米田太一様からは、草原は農業・農村と深い関係にある、しかしその手入れが大変で機能が失われつつある、草原は過去からつないできた大きな財産である、また草原は風景やトレッキングができる環境など農泊のキーコンテンツである、草原再生の文化と連携して保全だけでなく将来につなげていきたい、との挨拶をいただいた。



主催者あいさつ



選考委員のビデオメッセージと会場の様子

次は草原の里 100 選選考委員の紹介があった。草原 100 選の選考委員、湯本貴和氏（選考委員長／京都大学名誉教授）、安藤邦廣氏（筑波大学名誉教授）、岩井茂樹氏（静岡県東伊豆町長）、河野博子氏（ジャーナリスト）、高橋佳孝氏（一般社団法人全国草原再生ネットワーク代表）、町田怜子氏（東京農業大学地域創成科科学科教授）の 6 名は、司会の上野弥智代さんの指名に委員お一人お一人の言葉をのせたお話をいただきながら紹介して頂いた。あいにく欠席だった長沢裕氏（タレント、日本環境教育フォーラム理事）と養老孟司氏（東京大学名誉教授）からは大画面を通してビデオメッセージが届き、それぞれの専門分野の視点で選定に当たられたということを改めて感じ取ることができた。

フォーラムの第 1 部は「日本の草原・過去・現在・未来を考える」と題し、草原の里 100 選の選考委員長である京都大学名誉教授の湯本貴和先生による記念講演から始まった。

講演は日本の中の寒冷・風衝草原そして茅や牧として利用が続けられた半自然草原などの多彩な草原をスライドで紹介することから始まった。

日本の草原とは寒冷地草原や風衝地草原など自然草原ではなく、奈良県の曽爾高原など、茅場や採草地などとして利用された半自然草原をいう。島根県の西ノ島など日本離れした草原風景である。これは古墳時代までさかのぼるが、馬や牛の牧として利用され、特に西南日本の離島や半島に残っている。半自然草原とは火入れ・放牧・採草などによって人里の周りや高原・火山の山裾などに維持されてきた草原のことをいう。

旧石器時代（約 25,000 年前）の寒冷な日本に広がっていた草原は、縄文時代（約 7,000 年前）以降、



湯本選考委員長による講演

温暖化が進んで森林になっていく湿潤な気候となり、少しずつなくなっていく。大陸から来た草原性生物は残された草原で命をつなぐことになる。中国東北部や朝鮮半島・日本の草地に分布している「大陸系残存植物」オキナグサやアサマフクロなどの草本類は氷河期に移入し火山山麓や里山の草地に遺存しているが、絶滅が心配されている。

草原は寒冷期から温暖期に移行してもなぜ消滅しなかったのか？ それは人間が火入れなどで関与し続けてきたからである。そうでないと森林になっていくはずだ。例えば熊本県の産山村にある草原性希少植物「ヒゴタイ」は、現在、日本の中でとても面白い分布をしている。この状態は、氷河期に大陸から移入してきた「ヒゴタイ」には温度分布などで説明がつかない。「ヒゴタイ」は草原を人によって管理されてきたことの生き証人である。

明治から現在に至るまでの土地利用の変遷をしてみる。草地は荒地のカテゴリーに入るが、明治時代 20%、昭和 10%、現在 1%である。西日本でも明治時代の草地分布は 10%から 13%はあった。ではその草原はどうなったのかを見ると、①都市化される、②植林され人工林となる、③放っておかれ広葉樹林に遷移し、結果として草原面積が減った。中国地方の草原でも野焼きや放牧を行って草原を維持している。もちろんその中に草原性の植物も生き残っている。

九州の阿蘇は一万年以上の歴史ある日本で一番大きい人間管理下にある「野」である。大昔は道具がないので木を切り倒すことができない。それが発端で草地利用が始まり、人の手が入り続けてきた。火を入れることは高度な技術が必要で、これこそ文化的遺産である。

九州地方や長野県、東北の北上地方そして中国地



湯本選考委員長による講演

方など火山があるところに分布する黒ボク土。多くは人が火を入れたものである。阿蘇の草原はいつから成り立っているのかと阿蘇のカルデラ周辺の火山灰層と土壌で考察すると、3 万年前に火山灰が入って、13,500 年前から急に変わっている。当時の植生環境が分かる植物の化石である植物珪酸体（プラント・オパール）の分析から草原の歴史を見ても火入れなど人間活動によって形成されたススキ草原は13,000 年前から出てくる。当時は焼き畑ではなく、狩猟のために火をつけたと思う。焼き狩りといって火をつけることにより獣を追い出し捕まえるという方法で狩猟をしていた。馬を 70~80 頭従え、勢子を 2 万人使って宮司が先頭を切って狩りをしていた。火をつければ草が育つ。その野焼きの草原を牧としていく。軍事力である馬を大量に持っている者が馬を放牧するようになる。次第にそれが農耕への牛馬の利用が主になり、刈敷や屋根を葺く茅などの利用へと変わっていき、牧は馬から牛の放牧へと変わり、また草刈り場となった。しかし、燃料革命・屋根材の材料革命そして輸入依存の生活で草の価値が激減し、戦後は観光としての利用に先細っていった。その観光利用の草原も、過疎、高齢化、共同体の弱体化によって草原維持が困難で、中でも野焼きが困難になっている。

現在から未来を考えると草原とどう付き合うか、これは新しい課題である。ここで賢明な利用（ワイズ・ユース）という言葉がキーワードとなる。湿原を守る条約であるラムサール条約、これは水鳥の条約ではなく湿原の条約である。当時湿原は、居住や

農業に不適な場所、無駄な場所、埋め立てて開発するしかない場所とされ、世界的になくなっていった。この湿原を渡り鳥の中継地、希少な動植物の生息地とし、生物多様性の場、エコツーリズムや環境教育「人間と自然の共生」を学ぶ場として利用するなど、この湿原の「生態的特徴」を生かした利用（=ワイズ・ユース）を考えていくのだ。ここでは湿原を草原と置き換えて考えていい。

人間が生態系から得る利益、生態系サービスというのがある。これは4 つに分かれているうちの供給サービスを除けば、農水省で使っている「多面的・公益的機能」と同義語である。

草原のワイズ・ユースを考える。効率的にサービスが得られるように維持されてきた草原。しかし、「草の価値」が低下し、経済性も低下してきた。トレードオフがある生態系サービスのどれを優先するかが問題である。草原維持ではなく、そこに風車を設置した方がよい、など異なる価値を求める人達との間に葛藤が起こる。

また、かつては入会権が明確で、応分の負担は応分の利益を生んでいた時代ではなくなり、最近では観光業者と地元の関係のように受益者が管理負担者ではなくなっている。特に観光では起こりやすく、うまくいっていない。最近では、飼料費が高騰しているので、堤防の刈り草を河川事務所が刈り、畜産農家等に無償提供している例がある。

ここで生態系サービス支払いという考え方がある。例えば、草原から他の土地利用を考えると、生態系の管理から得られる便益は草原を維持するより大きい。一方で、景観や生物多様性の劣化、CO₂の放出など周辺の人々が負担するコストが多くなる。この負担コストを生態系サービス支払いとして受益者の負担の上に税金や CSR で上乗せする仕組みを作っていけば地権者も納得するだろう。

最後に、それぞれの地域での草原を生かした地域づくりを競い合いその結果を顕彰するのではなく、多様な姿を持つ草原の里を再発見し、この場に集った人たちが草原の里の仲間としてそれぞれの地で感じた課題を共有し、互いのアイデアや実践を学びあい、草原のある暮らしに育まれた「共創資産」を次代につなぐ場を作ろう、と講演を締めくくられた。

次に草原100選に認定された草原の里に対し認定授与式が行われた。認定書は全国草原の里市町村連絡協議会会長の岩井茂樹町長が各草原の里代表者一人一人に手渡した。記念写真撮影の後、代表者が約一分の意気込みスピーチをしたのだが、筆者を含め1分感覚が分からずしゃべり足りない、時間をオーバーして合図のベルに舞い上がる、などなかなか面白い趣向であった。最後に選定された草原の里の皆さんと選定委員が壇上に上がり、全体での記念撮影をして第1部の終了となった。



認定書の授与



未来に残したい草原の里 100選 2022年度の募集開始！

2022年度の募集を、10/18より開始しています。まだ応募をされていない地域のみなさまは、ぜひ応募下さい。また、まだ応募をされていない地域をご存じでしたら、情報提供やチラシの配布など、ご協力をお願いいたします。

詳細はこちら <http://sato.sogen-net.jp/>



各地からの報告

キスゲ平園地の活動紹介

(立原 遼：一般財団法人自然公園財団日光支部)

キスゲ平は栃木県日光市に位置する日光連山の東端、標高1,300m～1,600mにかけて広がる草原です。4月のカタクリに始まり、夏のシモツケソウなど年間を通して150種類を超すたくさんの種類の花が春から秋まで楽しめます。その中でも6月中旬から7月にかけて咲くニッコウキスゲの群落は一見の価値があります。ニッコウキスゲの名前の由来は日光に多く自生していたことからこの名前と呼ばれるようになったと言われ、ここで言う日光とはキスゲ平周辺を指すものと考えられています。



満開のニッコウキスゲ

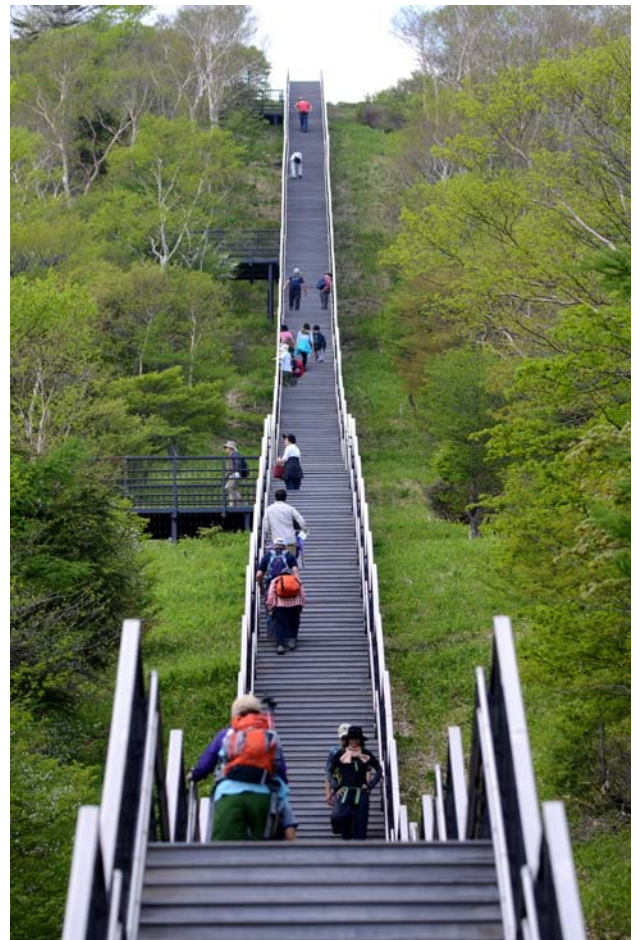
現在、キスゲ平は遊歩道や天空回廊と呼ばれる1,445段の階段が整備された自然公園として開放しています。今年、オープンから10年が経過し、地域住民や観光客が年間12万人訪れる日光市の中でも有数の観光スポットとなりました。

実はキスゲ平は2010年まで市営のスキー場として営業していました。近年の雪不足や設備の老朽化などの要因が重なり、継続が困難なことからスキー場は廃業してしまいましたが、当時からたくさんの草原性動植物が観察できる貴重な環境があったことで、再整備をおこない自然公園に生まれ変わった訳です。キスゲ平は里山環境のような半自然草原として現在に至るわけではなく、もともとあった自然草原にスキー場を作ったことで、人々の生活とは関りが少ない場所でも半自然草原が存続してきた環境なのです。

このような環境を保全するために私たち管理者は大きく以下の3つの活動を行っています。

- 1、半自然草原を維持する草刈り
- 2、ニホンジカの食害対策
- 3、人為的にニッコウキスゲの苗を植え、数を増やしていく補植活動

この中でも特に注力しているのはシカの食害対策です。日光市にはニホンジカが高密度で生息してお



天空回廊

り、その食圧による植物への影響が大きな問題となっています。これは、昭和 50 年頃から始まり、このころにキスゲ平のニッコウキスゲも大きな打撃を受け、急激に数を減らしました。事態を重く見た日光市は当時としては珍しいシカ侵入防止柵をいち早く設置し、ニッコウキスゲの保護に乗り出しました。現在のキスゲ平も周囲約 2 キロを柵で囲い、植物を保護しています。設置当時はシカの生息密度が低下し、植物への影響が軽微になるまでの一時的なものだと考えられていましたが、シカの密度は高止まりし、柵の設置は恒久化の様相です。この柵を管理するために周辺の草刈り、補修、巡視を行い公園内にシカが入り込むのを防いでいます。

上記のような活動をおよそ 30 年継続してきたことで、激減したニッコウキスゲの数は徐々に回復し、近年では一面に咲くニッコウキスゲを見ることができるようになりました。しかしながら、最盛期の密度には遠く及ばないのが現状です。今の環境に満足せず、今後も継続的に活動を行っていけば、かつての風景を取り戻せると信じています。



スキー場時代のキスゲ平



シカ侵入防止柵と入口ゲート

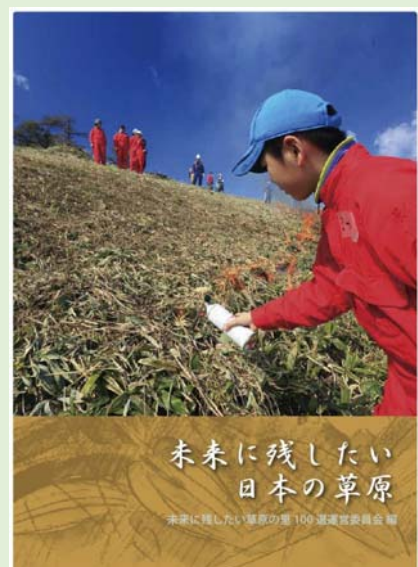
【書籍】『未来に残したい日本の草原』の発行にご協力下さい！

「未来に残したい草原の里 100 選」に選定された、全国 34 箇所の草原の里を紹介する書籍の発行を計画しています。現在、発行に必要な資金を集めるため、クラウドファンディングで協力を呼びかけています。草原の里からの返礼品もあります。

会員のみなさまのご協力を頂きますとともに、お知り合いの方へのお声かけなど、ご協力をお願いいたします。

詳細はこちら

<https://camp-fire.jp/projects/view/626241>



未来に残したい
日本の草原

未来に残したい草原の里 100 選 運営委員会 編

草原をめぐる動き (2022年10月～2023年1月)

- 10/1-2 ミズナラ林の間伐と遊歩道整備 (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 10/1 自然観察交流会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 10/29-30 上ノ原の茅刈り・茅刈検定 (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 10/31-11/6 上ノ原の茅刈りウイーク (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 11/4-5 茅刈り体験研修と茅葺き文化講座 (場所: 長野県小谷村 牧の入茅場、連絡先: 一般社団法人日本茅葺き文化協会)
- 11/5 八幡湿原の植物観察会 (秋) (場所: 広島県山県郡北広島町、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 11/13 八幡湿原の野帳観察会 (場所: 広島県山県郡北広島町、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 11/20 阿蘇の草原を守るボランティア体験ツアー (場所: 熊本県阿蘇市、連絡先: 阿蘇グリーンストック)
- 11/23 乙女高原の草原を守る! 茅刈りボランティア (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 11/23 千町原の茅刈り (場所: 広島県山県郡北広島町千町原、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 11/23 ASO 草原フェスティバル (場所: 熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センター、連絡先: 阿蘇グリーンストック)
- 12/3 自然観察交流会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 1 月中旬 田島ヶ原サクラソウ自生地の草焼き (場所: 埼玉県さいたま市桜区 桜草公園内「田島ヶ原サクラソウ自生地」、連絡先: さいたま市教育委員会 文化財保護課)
- 1 月中旬 若草山山焼き (場所: 奈良県奈良市奈良公園内 若草山一帯、連絡先: 若草山焼き行事实行委員会事務局 (奈良県奈良公園室))
- 1/7 自然観察交流会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 1/29 第20回乙女高原フォーラム (場所: 山梨県山梨市 夢わーく山梨、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 1 月下旬 流域連携活動「小貝川の野焼き」 (場所: 茨城県常総市小貝川河川敷、連絡先: 森林塾青水)
- 1 月下旬 流域連携活動「菅生沼の野焼き」 (場所: 茨城県坂東市菅生沼、連絡先: 森林塾青水)
- 1 月下旬 都井岬の野焼き (場所: 宮崎市串間市都井岬、連絡先: 串間市観光物産協会・都井岬ビクターセンター)

※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 52 2022年10月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】先般、「未来に残したい草原の里100選」の認定書授与式と記念フォーラムのお手伝いに行ってきました。2021年度には34の地域が選定されましたが、どれくらいの地域の方が授与式に来て下さるだろうかと、不安に思いながら準備をしましたが、予想を超える多くの地域から参加下さりました。1分間スピーチでは、各地の代表者から熱い思いのこもったコメントが語られ、草原への思いが感じられました。現在、2022年度の募集が開始されていますし、また34地域の草原の里を紹介した冊子を発行するためのクラウドファンディングも行われています。会員のみなさまのご協力をお願いいたします。